

136 しみじみと
土佐に生い立つ
幸せを
かみしめており
つじもりの夜

137 冬は過ぎぬ
小鳥の声の
華やけは
春待つ心
いやまさりける

138 美しや
權に人世を
漕がんとし
やむなく船を
沈めし人あり

139 角張った
空の拵がる
都合はて
過せぬ心
角張りゆへか

140 空をうかぶ
ものが仕立し
舞合はて
君は主演
演じぬべし

141 今日ちまた
北の浜辺の
潮騒は
悠久の音を
奏でていたり

142 風よちの
去りゆく君の
その肩を
抱かんとすれど
かひなき夕暮

143 朝日浴び
珊瑚の海より
昇り来る
桃色真鯛
命なりのけり

144 頂をひ
背伸びをすれば
我が心
拵がりてゆく
口登りかな

145 児心が皆
一本の樹と
育つこと
天に願はむ
初春の朝

146 春疾風
窓を揺すりて
過ぐる夜は
胸に溢るる
故郷の海

147 その昔
母と歩みし
白き道
彼方に優し
奇き山あり

148 故郷の
河の辺に
母子草
今年も春の
風こそよむか

149 親慕ひ
啼く子雀に
羨いなし
暖ゆく春の
口き軒端に

150 転た寝の
子猫のヒゲの
そよぎにも
いや待ち兼ねし

春は来にけり

151 足踏ひつ

花踏を踏む

嬉しちに

笑顔弾けて

よがしよがし花

152 柳春に

肩をゆあひつ

白鳥見つ

菜の穂

今昔は猫の

153 往々春の

小雨は夢む

菜の花

花踏へ

母は老いたり

154 花踏の

雪の松の

柳方につ

柳 春に

朝の柳風

155 母春の

母の春の

松風は

そよ風おりけむ

かの菜草

※ソケン・シーボルト

156 菜の花の

彼方に隠る

春日やあは

このお柳やへ

春の夕暮れ

157 春一柳

氷の匠風を

開ぬき花

そよだ一群

連翹の花

158 上巻来つ

短か鹿々の

足許に

柳一本

微風にそよむる

159 春やあ

霞なみく春の

そよだそよだ

田舎顔なる

露香子の花

160 春の宵

遠く遠く

芳香や

かの人去りて

沈丁開く

161 春雪に

擁ひし枝の

その先に

一点の痕

真紅の椿

162 束の間の

命のたけを

その彩に

直にこめたる

藤の花房

163 藤の花

命のたけを

束の間の

その葉に

直にこめたる

164 藤花の

藤の花の

ただ中で
心に沁みぬ
命たまゆら

病床に

射し入る朝日

その中に

君が給ひし
ピンクカーペラ

166 ひひそりと

草かげに咲く
木瓜の花
時には我も
かくあらまじや

167 浮かぶ花弁

梅桜
あはれ今年の
春も往ぬめり

168 黒土を

擦げて覗く
チューリップ
新芽の翠
命なりけり

169 かの人の

黒き壁に

映りいし
宵の明星
想い出せる日

170 白鷺の

背交にありし

澄める皓
凛冽にして
青春至る

171 何処より

来りしものぞ
松林
一ひひと
桜花弁

172 蓮華草

風に靡ける
ただ中に
菜の花一本
天を指しおり

173 今一度

海を見たしと
いう人に
急ぎ届けし

岬のストック

174 胸一杯に

吸い込める
梅の香染まる
如月の夜

175 若者が

母に手を振り

ただ一人
夜汽車に乗りぬ
潮騒の駅

176 身は余の

希望と不安
背に負ひて
ゲートに消えし
若者ありき

177 径の辺の

礫となりて
ただ独り
濡れそぼし
往く春の雨

178 飛び跳ねる